

加古川市所在

大亀谷山古墳

-山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXIII-

2001年3月

兵庫県教育委員会

加古川市所在

おお かめ たに やま
大亀谷山古墳

-山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXIII -



2001年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県加古川市平荘町磐に所在する『大龜谷山古墳』の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成6年度に実施した。調査は兵庫県教育委員会の深井明比古・柏原正民が担当した。
4. 調査現場での遺構実測・写真撮影は、各調査員が分担して行なった。
5. 整理作業は平成13年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。遺物写真是（株）タニグチ・フォトに撮影を委託した。
6. 本書に使用した方位は、国土座標V系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また方位は座標北を指す。
7. 本書に掲載した図版のうち、遺跡分布図には国土地理院発行2万5千分の1地形図「三木」「社」図幅を使用した。他の挿図については奥扱を個別に記したが、個別の遺構図は現地で調査担当者が実測した図面を元に作成した。
8. 発掘調査に際しては、次の方々のご指導・ご協力を得た。記して感謝いたします。
高橋美久二、小東憲郎、李 子文、呂 智栄
9. 本書の執筆は調査担当者が行ない、編集は柏原が行なった。
10. 本報告にかかる出土遺物ならびに記録写真、関係書類は兵庫県埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会魚住分館において保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(1)
第2節 調査の経過	(1)
第3節 整理作業の経過	(2)

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の立地	(3)
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	(4)

第3章 調査成果－遺構

第1節 掘削前の状況	(8)
第2節 外部施設	(8)
第3節 内部構造	(11)
第4節 その他の遺構	(12)

第4章 調査成果－出土遺物

第1節 土器	(14)
第2節 金属器	(15)

第5章 まとめ

第1節 主体部－横穴式石室について	(17)
第2節 古墳構築過程の復元	(17)
第3節 墳丘周辺の遺構について	(17)

挿図目次

第1図 発見直後の大龜谷山古墳	(1)
第2図 発掘調査状況	(2)
第3図 周辺の地形	(3)
第4図 大龜谷山古墳と周辺の古墳	(5)
第5図 墳丘測量図（掘削前）	(8)
第6図 墳丘・墓擴堆積状況図	(9)
第7図 ピット群 P-1～4	(12)
第8図 ピット群 P-5	(13)
第9図 出土遺物実測図（1） 土器	(14)
第10図 出土遺物実測図（2） 金属器	(16)

表目次

表 1 周辺古墳地名表.....	(4)
表 2 出土遺物法量表.....	(16)

図版目次

図版 1 墳丘測量図（検出時）
図版 2 石室平面図
図版 3 石室展開図・床面平面図
図版 4 箱式石棺展開図
図版 5 石室・箱式石棺 墓壙平面図
図版 6 焼土壙 S X01・02

写真図版

写真図版 1 大龜谷山古墳全景 上：古墳全景（調査前の状況） 中：古墳全景（墳丘検出後） 下：石室開口部（墳丘検出後）	写真図版 2 石室・墳丘 上：古墳全景（墳丘・周溝） 中：石室 天井石上面（全景／東から） 下：石室開口部（天井石検出後）
写真図版 3 石室 上：石室開口部（羨道・閉塞石） 下：墳丘検出作業 (石室、ピット群 P-1~4)	写真図版 4 石室 上：奥壁の状況 中：左側石全景 下：右側石全景
写真図版 5 玄室内部（組合せ式箱式石棺） 上：箱式石棺（検出状況） 中：箱式石棺（南小口から内面を見る） 下：箱式石棺（蓋石除去後／棺身全景）	写真図版 6 その他の遺構 上：周溝（炭層検出段階） 中：焼土壙 S X01（南から） 下：焼土壙 S X02（西から）
写真図版 7 墓壙 上：墳丘断ち割り 中：墓壙全景（基底石残存・作業風景） 下：墓壙全景（石材除去後）	写真図版 8 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大龜谷山古墳の所在する工区は三木小野インターチェンジと加古川インターチェンジ間に位置する。この工区は日本道路公団姫路工事事務所により、加古川東工事区として工事発注されていた。

当道路用地内は樹木の繁茂が著しく、1986年（昭和61年）に分布調査されたが、周知の遺跡などが再確認されたのみで新たな埋蔵文化財の発見には至らなかった。その後、当工区の工事は日本道路公団姫路工事事務所により奥村組土木興業・浅川組共同事業体に発注され、施工されていた。1994年（平成6年）11月に伐採作業及び盛土工事を開始したところ、谷部に向かって開口する石組みをもつ古墳状の高まりを見た。施工業者は工事を一時中止するとともに、発見の旨を日本道路公団に連絡した。日本道路公団はそれを受け、直ちに兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に連絡し、今後の措置についての協議を申し入れた。

日本道路公団から連絡を受けた兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所は、11月21日に職員を現地に派遣し、古墳時代の横穴式石室が単独で存在する状況を確認した。

この新発見の古墳は加古川市平野町菅原新池ノ尻大龜谷山149-1に所在することから、加古川市教育委員会と協議して「大龜谷山古墳」と命名した。11月29日に日本道路公団および兵庫県教育委員会が協議した結果、当古墳の周辺は盛土部分にあたり、すでに盛土工事が本格化した現段階で、この古墳は工法等による保存も不可能との結論に至った。また日本道路公団からは、文化庁長官あてに遺跡の発見通知が提出されると共に早急な調査対応の要望があり、1995年1月下旬からの発掘調査開始に向けて、調査が進められた。



第1図 発見直後の大龜谷山古墳

第2節 調査の経過

発掘準備のため1995年1月17日に現地打ち合わせを予定していたが、兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）が発生し打ち合わせは中止せざるを得なかつた。その後、発掘担当職員および施工業者社員は災害復旧支援の必要が生じ、調査開始を遅らさざるをえなかつた。

阪神・淡路大震災被災者への緊急な支援も落ちつきを見せ始めた2月6日によくやく発掘調査を開始した。調査地付近は大規模な被災を免れた地域ではあるが阪神および神戸方面被災地への復旧・復興の交通確保のための交通規制は依然続いていた時期にあたり、アクセス等に困難を極めた。

3月初旬には調査が本格化し、古墳墳丘が方形であることや周溝付近に柱穴が発見され、京都府立山城郷土資料館の高橋美久二氏（現滋賀県立大学人間

文化学部教授)の現地指導により“はたさしもの”を立てた遺構である可能性が高いことなどの教示を得た。

発掘調査は順調に推移し、3月中旬に最終段階として横穴式石室墓塚を掘削した。なお一般県民を対象とする現地説明会は時間的制約や危険を伴

う工事箇所であることな
どから実施できなかつたが、3月17日に無事発掘調査を完了した。



第2図 発掘調査状況（背後は建設工事中の山陽自動車道）

《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 池水義輝

・調整事務担当 調査第2班 調査専門員 井守徳男 主査 水口富夫
・発掘調査担当 調査第1班 主査 深井明比古 技術職員 柏原正民

第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業のうち、出土した土器については取り上げ後ただちに洗浄を行った。また調査時に作成した実測図や写真記録等も、調査と平行して整理した。

調査成果の取りまとめに伴う、本格的な整理作業は、平成12年度に埋蔵文化財調査事務所において実施した。作業内容は、注記・接合補強・実測・整図・出土品の写真撮影などである。また同時に報告書の執筆・叢集をおこない、内容を公にした。

《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

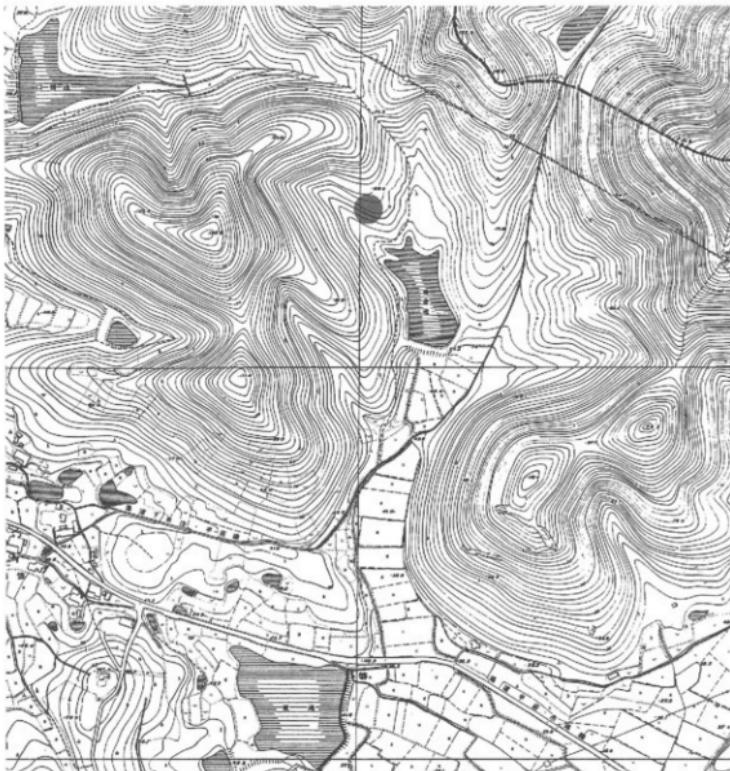
・調整事務担当 整理普及班 調査専門員 岡崎正雄 主査 岡田章一 主任 深江英憲
・整理作業担当 調査第2班 主査 深井明比古 調査第3班 主任 柏原正民
嘱託員 今村聰美・岡田祥子・香川フジ子・木村淑子・前田千栄子・鈴木まき子・
八木富美子・藤井光代・河上智晴・早川有紀

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の立地

加古川市は兵庫県の南部、瀬戸内海に面した中央部に位置する。その名称でもある加古川の下流に市域を持ち、面積138.51km²・人口269,669人（平成12年10月現在）を数える。南部には東播地域の中核をなす市街地が広がり、北部は田園地帯である。

市域の南北は地形においても違いが見られる。南部は加古川の活発な活動によって形成された沖積平野で、北部には日岡段丘・野口段丘といった標高15～20mの段丘が広がる。さらに小野市との境界付近では、左岸がいなみの台地の一端をなす加古段丘に連なるに対して、右岸は丘陵が河岸まで迫って地形の違いを顕著に現している。



第3図 周辺の地形（『加古川市文化財地図』1990より、該当箇所を抜粋。1：10,000）

報告を行なう大龜谷山古墳は市の北部、加古川右岸の丘陵部に位置する。小野市との境界をなすこの丘陵は、加西市域より続く法華山地の東端（来住山地）で、山麓には麓扇面ならびに小扇状地が発達し、複雑な谷底平野が形成される。山地を深く開拓する景観は特徴的で、権現ダムや平荘ダムなど堰きとめて貯水池に利用されたものもある。

古墳が所在する平荘町磐は山あいに住宅と農地が広がる純農村地帯で、集落の中心が磐西と磐東に別れる。近世には磐西が藤山新村、磐東が寺谷新村を称し、それぞれ独立した集落であったが、明治11年に合併して印南郡磐村となった。村名の由来は、至近の山中にあった「紅岩」によると『印南郡誌』にある。明治22年には周辺の村落と合併して平荘村となり、のち町制を経て昭和30年に加古川市へ合併されて現在に至る。昭和57年3月、大規模な工業用水用ダム（権現ダム）が集落の西部に造られた以外は、山間の静かな農村風景を変わらずに保持している。

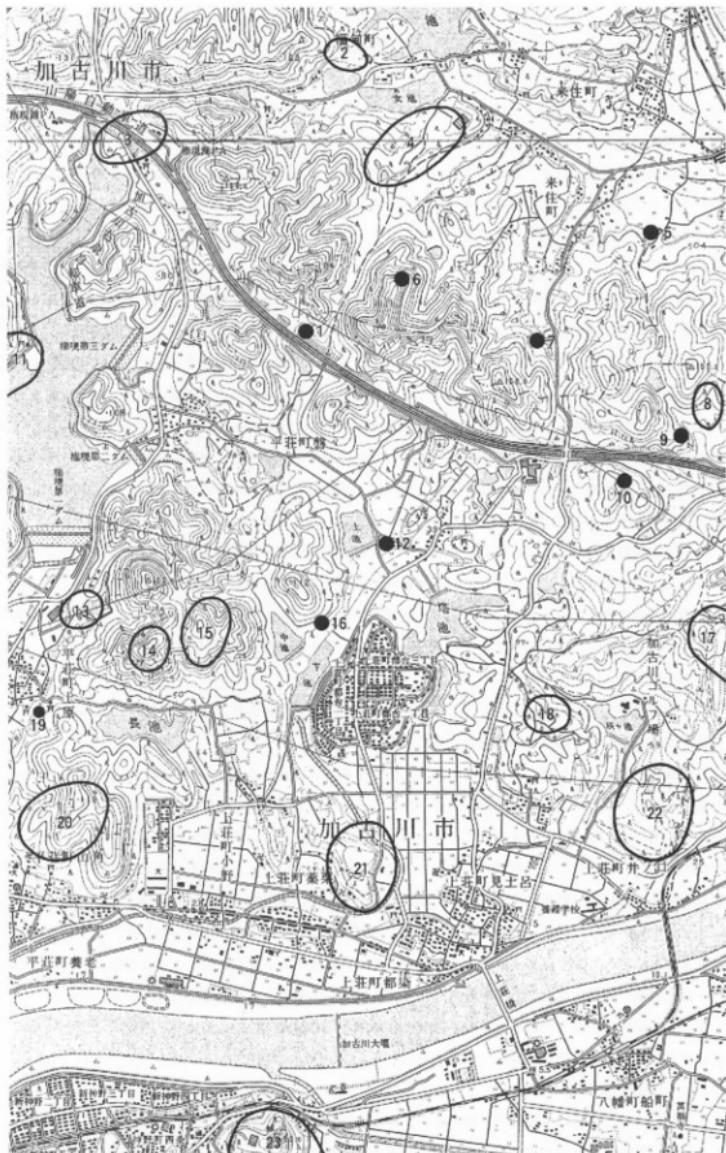
古墳は磐西集落の北東100mにある。東池の北側から県道下来住・平荘線に沿って延びる細長い谷の最深部で、岩倉池の北西に突き出た丘陵上に立地する。開拓する谷は途中で屈曲しているため、直接集落を望むことはできない。まさに谷奥で逼塞しているような状況であった。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

大龜谷山古墳に接する遺跡として、丘陵を挟んだ東の谷に奈良時代の古窯址とされる磐乙ヶ平池遺跡がある。同地点では旧石器も採集されているようで最古の人類痕跡といえるものの、詳細はわからぬ。また周辺において現在までに知られている遺跡は多いといえず、この傾向は加古川市上荘町・平荘町に視野を広げても変わらない。旧石器～弥生時代の知見は、あまり蓄積されていない状況にある。続く古墳時代に入ると、加古川を挟んだ左岸に日岡・西条古墳群が登場、大龜谷山古墳の立地する右岸でもいくつかの古墳が出現する。ここでは周辺の古墳を中心に、既存の調査成果を概観する。

表1 周辺古墳地名表（Noは、第2図と共に通）

No	遺跡名	所在地	No	遺跡名	所在地
1	大龜谷山古墳	加古川市平荘町磐	13	上原古墳群	加古川市平荘町上原
2	福甸古墳群	小野市福甸町黒岩	14	天坊山古墳群	加古川市上荘町小野
3	奥新田古墳群	加古川市平荘町奥新田	15	地獄谷古墳群	加古川市上荘町小野
4	岩倉古墳群	小野市来住町奥谷ほか	16	都台古墳	加古川市上荘町小野
5	陣塚古墳	小野市来住町家老戸谷	17	高塚山古墳群	加古川市上荘町白沢
6	米住西霞懸山古墳	小野市米住町西霞懸山	18	八ツ塚古墳群	加古川市上荘町井坂
7	池の内西古墳	小野市米住町池の内西	19	上原古墳	加古川市平荘町上原
8	カメ焼谷古墳群	加古川市上荘町白沢	20	印南山古墳群	加古川市上荘町谷口
9	山尾古墳	加古川市上荘町白沢	21	長慶寺山古墳群	加古川市上荘町薬栗
10	白沢西山古墳	加古川市上荘町白沢	22	井ノ口古墳群	加古川市上荘町井ノ口
11	中山古墳群	加古川市平荘町中山	23	西条古墳群	加古川市山手
12	寺谷古墳	加古川市平荘町磐			



第4図 大龜谷山古墳と周辺の古墳 (1 : 25,000)

弥生時代に入って加古川沿いの沖積平野には、いくつかの大規模な集落が登場した。左岸で美乃利遺跡・溝之口遺跡、右岸で東神吉遺跡などの遺跡が出現、その後は時代が下るにつれて数・規模ともに、顕著な増加を見せる。これに呼応するように、弥生時代後期には集落の首長墓と考えられる墳丘墓が出現する。左岸の西条52号墳、右岸の神吉8号墳・ハツ塚3号墳などで、いずれも平野を望む丘陵状に立地し、前方後円墳を中心とした古墳時代への萌芽がみてとれる。

地理的環境でも触れたが、加古川下流の地形は右岸と左岸で大きく異なっている。左岸は加古川の形成した広大な冲積平野の背後に、広大ないなみの台地の西端にあたる段丘が広がっている。一方、右岸では山地・丘陵が河川に迫って、狭隘な谷底平野が散在する。この地形の違いが、古墳の有り方とも比例している。

古墳時代の幕開けとともに、加古川左岸の日岡・野口段丘上には、播磨でも有数の古墳群である日岡古墳群・西条古墳群が出現する。日岡古墳群は開発の影響を受けて消滅した古墳が多く、実態をつかみかねるが、後期にかけて長期的な造営が想定されている。4世紀中葉から5世紀前半にかけて盛期を迎える、日岡山古墳・勤使塚古墳など8基の大型古墳が連続と築造されている。細長い段丘に60基を越える古墳で構成される西条古墳群は、日岡古墳群の北東約2kmに位置する。中心の前方後円墳である行者塚古墳は1970年から継続的に調査が行われ、1995年には後円部の墳頂および墳丘～周濠を掘削して、実態に迫る成果を収めた。このほか現存する古墳には、帆立貝形古墳の人塚古墳・尼塚古墳がある。5世紀前半が盛期と考えられているが、日岡古墳群と同じく、開発によって消滅した古墳が多い。

2つの古墳群は、構成する古墳の量と質のいずれも周囲の古墳群を凌駕し、播磨でも有数の充実を誇っている。造営の背景には、畿内中枢部との政治的動向を関連付けた解釈が多い。両者の関係についても、近接する位置や長期的な造営から、数々の興味深い問題を含んでいる。加古川左岸に並列して拮抗する2つの政治勢力、首長墓の移動する1つの連合体、などの見解があるが、消滅した古墳が多く、実態も不明なことは残念である。

一方加古川右岸では、前期古墳として長慶山古墳・天坊山古墳があり、弥生後期の墳丘墓を引き継ぐ存在ではあるものの、際立った古墳群は形成しない。

長慶寺山古墳群（21）は、円墳6基、前方後円墳1基で構成される。前方後円墳の1号墳は全長34mの前期古墳で、主体部は1955年に発掘調査された。主体部は列石で囲まれた粘土床との報告があるが、構造に不明な点が多い。「長宜子孫」銘を持つ内行花文鏡、鉄斧、刀、劍、鐵鎌などが出土している。天坊山古墳群（14）は径16mの円墳で、1969年に発掘調査が行われた。2基の堅穴式石室を持ち、第1主体部からは、獸形鏡・鉄斧、鐵鎌・鐵劍・劍頭などとともに壮年男性の頭蓋骨が、第2主体部からは、画文帶神獸鏡の破片・管玉・鐵劍・鉄斧・銅鏡などが出土した。ハツ塚古墳群（18）は、弥生時代後期の墳丘墓である3号墳のはか、方墳1基と円墳4基で構成される。葺石を持つ1・2号墳は3世紀後半～4世紀初頭、5号墳は無袖の横穴式石室をもつ6世紀末に築造されたと考えられている。

続く5世紀代、右岸では古墳が極めて少なく、左岸との不均衡が顕著となる。造墓が目立つのは5世紀後半以降で、日岡古墳群の対岸に池尻2号墳・カンヌ塚古墳が出現する。この古墳周辺では、以後60基以上の古墳が造営され、7世紀にかけて大規模な平荘湖古墳群を形成する。

6世紀に入って、加古川流域でも横穴式石室を主体部に持つ古墳が登場する。6世紀後半には中小規模の古墳が密集する状況も現れ、日岡古墳群や西条古墳群でも、前～中期の古墳に続く後期の古墳が造営される。一方右岸の平荘湖古墳群では、左岸の古墳群を凌駕する勢いで、旺盛な造墓活動を行なう。

前代との逆転とも受け取れる状況は、古墳時代の中期に右岸域において発生した新たな政治勢力が、後期に入って大きく成長したことが原因と考えられている。

また平莊湖古墳群の周辺では、単独または2・3基の小規模な群構成による古墳群がいくつか出現する。平莊湖の北東4kmに、同じく工業用水の確保を目的とした権現ダムがあり、建設で水没した範囲にも3基の古墳で構成される中山古墳群（11）がある。主体部はいずれも横穴式石室で、石室の構造や規模に違いがあることから、6世紀中葉から7世紀にかけて連続して造営されたと考えられている。同じような短期間に造営された2・3基の古墳で構成されるものとしては、上原古墳群（13）や奥新田古墳群がある。山陽自動車道建設に伴って、平成6年度に兵庫県教育委員会によって調査された奥新田古墳群（3）は、未調査の西古墳と合わせて、現時点では3基の古墳が確認されている。調査された東1号墳・東2号墳はいずれも横穴式石室を主体部に持ち、7世紀の土器が出土した。なかでも東2号墳では、石室内に家形石棺1基と大小7基の組合箱式石棺を埋葬している。

このほか、来住山地を挟んだ北側でも、福庭古墳群（2）・岩倉古墳群（4）・陣塚古墳（5）といった古墳が、横穴式石室を主体部に持つ。また小野市黍田へつながる谷の上流、加古川市白沢には白沢西山古墳（10）・カメ焼谷古墳群・神子谷古墳群などがある。カメ焼谷古墳群（8）・神子谷古墳群は、1988年に加古川市教育委員会が発掘調査を実施して、小型化した無袖の横穴式石室や、片口式小石棺・小型の箱式石棺が主体部として採用される、6世紀後半から7世紀初頭の古墳群であることが明らかとなった。石室規模や形式、副葬品の年代感などに、いわゆる「終末期古墳」の特徴を備えた古墳であり、その登場と前後して、当地方の古墳築造も文字通り終焉期を迎える。

参考文献

- ・田中真吾ほか『播磨の地理 自然編』神戸新聞総合出版センター（1994）
 - ・田中真吾ほか『播磨の地理 人文編』神戸新聞総合出版センター（1993）
 - ・『兵庫県大百科辞典』神戸新聞社（1983）
 - ・『角川地名大辞典 兵庫県』（1988）
 - ・『加古川市史 第1巻 本編I』加古川市（1989）
 - ・『加古川市史 第4巻 史料編I』加古川市（1996）
 - ・『小野市史 第4巻 史料編I』小野市（1997）
 - ・『印南郡誌』兵庫県印南郡役所（1916）
 - ・『加古川市遺跡分布地図』加古川市教育委員会（1984）
 - ・『加古川市遺跡分布地図 第2版』加古川市教育委員会（1994）
 - ・『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会（2000）
 - ・山本祐作『兵庫県加古川下流域の後期古墳の動向』『古墳文化とその伝統』勉誠社（1995）
 - ・高野政明『加古川下流域における首長墓の変遷』『古墳文化とその伝統』勉誠社（1995）
- このほか、統計資料については、加古川市ホームページ(<http://www.city.kakogawa.hyogo.jp/>)の記載内容を参照した。

第3章 調査成果－遺構

第1節 調査前の状況（第5図）

古墳は東南方向へ延びる谷の北側斜面に位置している。存在が確認された時点では、すでに道路工事に伴う土盛りが行われ、道路法面に横穴式石室の開口部だけが露出している状況であった。このため発掘調査に先立って土盛りを除去し、工事開始前の表土を再び出現させたうえで旧地形の測量を実施、旧態の復元を試みた。

現れた旧地形によれば、石室の周辺に墳丘と見られる隆起が認められ、北部では斜面と墳丘を区画する平坦面や、わずかな周溝状のくぼみが看取できた。墳丘は南西部分を中心に流失・削平が認められたものの、南部では2m近く遺存していることが明らかとなった。工事が始まる前には総じて明瞭な隆起を保っていたと考えられる。

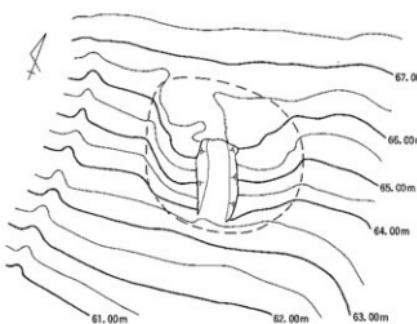
石室内部は、玄室部分のみ天井石が遺存していた。袖石とおもわれる立石の一部が露出し、調査前に開口していた部分は玄門の上半部分とわかった。調査前の開口部位にあたる袖部付近の床面に1m以上の流入土が堆積していた。また羨道の下部も流入土によって覆われ、左右それぞれ基底石がいくつか遺存する状態であった。

第2節 外部施設

1. 墳丘・墓壙（図版1・5）

墳丘は、上面において流出や後世の改変を受けているものの、天井石の3分の2を覆う状態で認められた。標高を減じる南へ向かうにつれて、隆起は明瞭となるが、南西部では削平による乱れがある。また丘陵の斜面下方にあたる石室の開口部へ墳丘南斜面は、流出によって地形が変化し、築成当時の様子を知る手掛かりがほとんど失われていた。

北・東・西の墳丘裾部は、周溝によって類推できる。南側墳裾の周溝は流出しているものの、南東部分で直線の地山整形痕跡が検出された。以上の状況から、大龜谷山古墳は南北11.7m・東西14.3m（含、周溝）のいびつな方墳と考えておく。

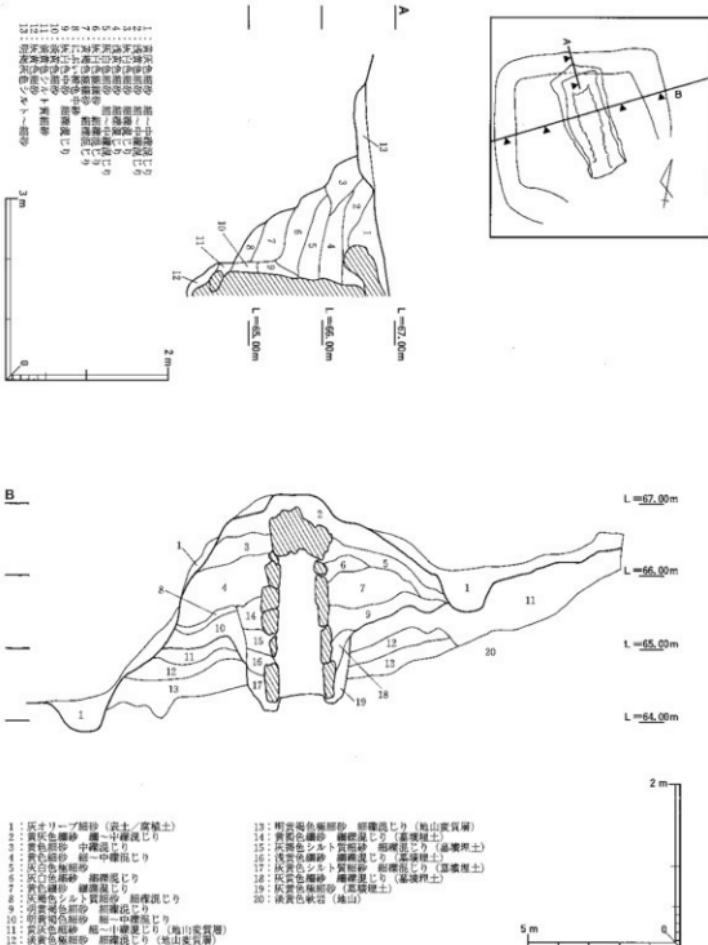


第5図 墳丘測量図（掘削前 1:2,500）

なお、南東の墳丘斜面上において、須恵器数点をまとめて検出した。古墳築造後に堆積した層からの出土であり、後世に石室内から持ち出された遺物と考えられる。

墓壙は「コ」の字形で、斜面と直交方向に設けられる。開口部側は、基盤層である灰褐色シルトを掘削するのに対して、奥壁側では下層の淡黄色軟岩まで掘りぬき、床面を平坦に保っている。墓壙の周壁は、奥壁側のみ階段状とし、側壁側は垂直に近く落とす。

基底石の下部は、玄室・羨道とも一石ご



第6図 墓塁・墓壙堆積状況図

との掘り方を設けている。石材よりも大きく、部分的にシルトや砾石を詰めて安定を図っていた。

2. 堆積状況（第6図）

墳丘の隆起が明瞭な東西方向のみ、墓壙の下50~80cmの深度まで掘削して、基盤層以下の状況を確認した。斜面の上方にあたる北側では、墓壙が深く落差が著しいため、安全上の問題に配慮して、石材の除去と墓壙の検出にとどめた。

墳丘の東西断面・奥壁の裏側にあたる墓壙北断面について、堆積状況を略述する。なお、石室も含め

た構築状況は、第5章で改めて触れる。

A. 東西断面 東西では、全部で20層の堆積を確認した。各層を構築の工程ごとに分類する。

①後世の堆積土（第1層）…墳丘の構築後に堆積した土だが、工事用盛土の除去に際して、表層はある程度失われた可能性がある。

②墳丘盛土（第2～10層）…石室を挟んで東西に縞状で積み上げられる。一つの堆積は厚く、土質の異なる堆積を何回も積み重ねる状況は、認められなかった。東西の層序はほぼ共通するが、西側では第10層を切りこむ形で幅の狭い掘り方が新たに設けられていた。天井石の架構後は、覆土（第2層）を盛って形を整える。

③石室裏込め土（第14～19層）…石室の東西で状況が異なる。東側壁は基盤層を掘りぬいた墓壙に直接裏込め土（18・19層）を詰めるのに対して、西側壁は基盤層の墓壙に17層を詰めた後、一端墳丘を盛って（第10層）から新たに墓壙を掘り、裏込め土（14・15・16層）を詰める。

④基盤層・丘陵の岩盤（第11～13層）…11層の上面が、古墳構築時の基盤層である。

B. 北側断面 急斜面のため墳丘は隆起をなさず、鞍部状になる。墳丘にあたる堆積は、天井石の覆土（第1層）のみであった。墓壙は深く壁面が階段状をなす。埋土は11層で構成される。

奥壁の基底付近は、基盤層に穿った墓壙に直接裏込め土を詰めているが、上層では石材との間隔が広いため、一端盛り土を行なって周壁の幅を狭めている（第7・8層）。これらの層は強固に叩き締めが行なわれている。奥壁を立てた後は、裏込め土を高めて安定させながら、上層では天井石との設置部分を整える（第2層）。

なお周溝（第13層）は、堆積状況から墓壙と墳丘の上面に切りこんで設けることがわかった。

3. 周溝（図版1）

墳丘北側の平坦面を中心に検出した。東西13mにわたって直線で延び、南へ折れ曲がる。西側隅は直角に近いが、東側は内凹が聞き気味となる。傾斜が下ってゆくにつれて深さが失われ、南部ではコーナーも含めて痕跡が不明瞭である。北辺の周溝は石室の主軸とズレを生じ、石室主軸の直交よりも11度ほど南へ振っている。

最も良好に遺存した北辺では、緩やかなレンズ状の断面を呈し、深さ0.14mを測る。底面は尾根に従って南北にゆるやかな傾斜を持つ。周溝底面からは墓壙の上面が検出できたことから、墳丘構築後に周溝を掘削したとわかる。

周溝の底部では、炭層の堆積を検出した。西コーナー・北辺中央～東辺にかけて認められ、薄く均一に堆積する。上層の埋土からは、炭化物の顯著な混入は認められず、後世に山火事等で流入した可能性は低い。なお炭層を除去した部分から、焼土・被熱痕などは確認できなかった。

周溝北辺の背後には、地山を削りこむ整形面が検出された。南北3mの幅で、周溝と一定の間隔を保ち、東西14mの範囲に緩やかな斜面が形成されている。古墳の築造による成形や墳丘盛土の確保とともに、古墳の背後を区画する意図も考えられる。この緩斜面上からは周溝のほか、ピット群・焼土壙などを検出した。

第3節 内部構造

1. 埋葬主体（図版2・3）

主軸をN-26度-Wにおく、全長6.68mの両袖型横穴式石室である。石室は、玄門から羨道にかけての

天井石ならびに側壁上部を失うほかは、すべての石材が遺存している。

玄室の規模は、長さ3.24m、幅は奥壁で1.28m、玄門で1.60mを測る。奥壁と袖部の幅が等しく、石室の平面は台形をなす。両袖の突出はわずかで、左右とも約0.15mであった。

羨道は、長さ3.44m、幅は玄門で1.28m、羨門は石材が消失するため不明だが、現状での先端部分は幅0.87mである。

2. 玄室

両側壁は内傾気味でたちあがる。石材の用法は左右で若干の差があるが、基本的には3ないし4段に積み上げている。数回にわたって揃える石材の高さは、墓壇の堆積状況とも対応する。上部に向かうに従って、小ぶりの石材を用いる。

奥壁は、基本的に大きな石を1枚で構成する。欠けて隙間のできる西側には、比較的小さめの石材を積んで接点を安定させる。玄室床面から天井までの高さ1.85mである。

天井石は奥壁から袖石にかけて、4石が遺存する。袖部から玄室中央を覆う石材が最も大きく、長さ2.15m・幅1.72m・厚さ0.74mである。玄室中央に架けられた石材はやや小ぶりで、長さ1.97m・幅0.95m・厚さ0.37mを測る。奥壁付近は2枚の板材を並列して用い、西側が長さ1.25m・幅1.22m・厚さ0.38m、東側が長さ0.75m・幅0.58m・厚さ0.41mであった。割れ面が一致することから、この2枚は本来同一であったかもしれない。

石材の隙間が大きい部分は、小さい石で詰めて目張りを施す。隣り合う石材の接点状況から、奥壁側より羨道へ向かって架け延していったと考えられる。

玄室の床面では、ほぼ全面に渡って炭層が認められた。層からは陶器（6）・寛永通宝（I-5）などが出土し、除去した時点で石室基底石の掘り方が露出したことから、後世に石室の再利用が行われた際の堆積と考えられる。古墳にともなう時期の遺物は、玄室内からまったく出土していない。再利用にあたって玄室床面の搅乱、遺物の持ち出しなどが行われた結果であろう。

3. 羨道

長大な立柱状の石材を左右に用いて袖石とし、その先に羨道が続く。主軸は玄室と一致しているが、東側壁は開口部にもかって幅を減じる。側壁のはほとんどが消失して、基底石のみが遺存する。天井は玄室より1石程度低いと考えられる。

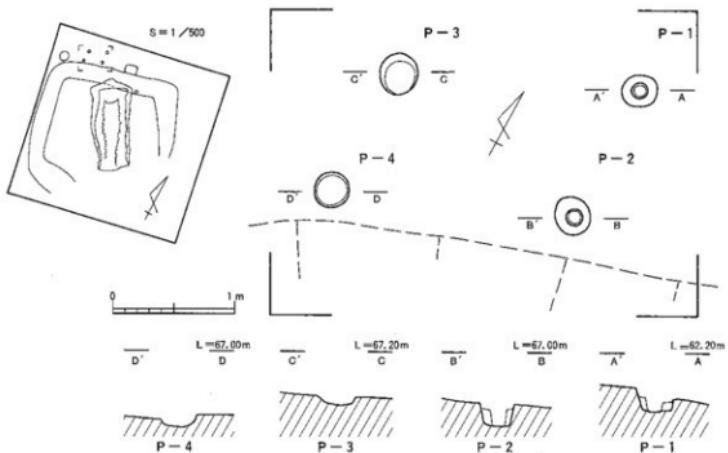
床面から炭層は検出できなかったが、流入土が床面直上まで達し、不規則な起伏を生じる。玄室と同様に、後世の搅乱による影響であろう。なお、流入土中からは土器、金属製品などが出土したが、現位置を推定できる証左は得られなかった。

開口部分は、東側壁の先端部分から斜面になって墳丘と同化、墓道の痕跡などは検出できなかった。このため墳丘から羨門は確定できない。東側壁先端の床面からは、拳大の石材が12個まとめて検出され、閉塞石の一部が遺存したものと考えられる。

4. 箱式石棺（図版4）

袖部において、組合せ箱式石棺を1基検出した。蓋石と底石、側板石3枚で構成される長方形で、石室の主軸方向に長軸をあわせる。規模は内法で長さ0.84m、幅0.48m、棺身の深さ0.24mである。

袖石と羨道の東側壁を利用して、コの字に石材を立てて側石とする。西側石は長さ0.91m・幅0.38m・厚さ0.14m、北側石は長さ0.61m・幅0.34m・高さ0.15mを測り、南側石は欠損する。中央には長さ0.80m・幅0.45m・厚さ0.06mの薄い石材を底板として用い、欠けている北東隅には方形の板石を2枚詰め



第7図 ピット群 P-1~4

て補う。蓋石は長さ1.01m・幅0.32m・厚さ0.32mの石材で、検出した時には西側板の上に動かされた状態であった。

玄室の床面に、長さ1.23m・幅0.75m・深さ0.15mの墓壙を掘って構築する。平面は長方形で、底面は側石の下部がわずかにくぼむものの、ほぼ平坦であった。墓壙の埋土は漂泥じりの淡褐色細砂で、底石の下部と側石の掘り方外側から、きめ細かな淡茶褐色シルトが検出された。底石の下には10cm以上の厚さで敷かれていた。側板の基部および底石を安定させるために敷かれたものであろう。

石棺の内部から、遺物は出土しなかった。

第4節 その他の遺構

1. ピット群 (第7・8図)

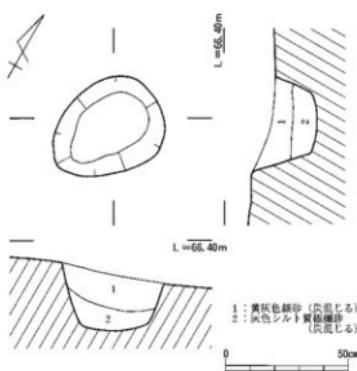
古墳周溝の北側で、5基の円形ピットを検出した。石室の北西・SX02の東に4基 (P-1~4)、北東の周溝南肩に1基 (P-5) 存在する。

A. P-1~4 平行四辺形に配置され、内部に柱痕を認めたもの (P-1・2) が東に、確認できなかった浅いもの (P-3・4) が西に2列で並ぶ。

各ピットの間隔は、南北が2m、東西が1mである。柱穴の平面は正円形、規模 (径/深さ) はP-1が $0.29/0.20m$ 、P-2が $0.30/0.18m$ 、P-3が $0.32/0.06m$ 、P-4が $0.27/0.10m$ をそれぞれ測る。P-1・2は中央から柱痕跡を検出した。痕跡から、直径0.13mの円柱と考えられる。

B. P-5 周溝の埋土から切りこむことはなく、底面において検出された。ややいびつな梢円形で、径/深さは0.45/0.25mを測る。

埋土は2層で構成される。炭・焼土の包含が顕著で、周溝底部に堆積する炭層と共通した特徴が、上層には見られた。柱痕は認められず、遺物の出土もなかった。



第8図 ピット群 P-5

北側の緩斜面において検出した。

検出面の平面は橢円形に近く、南北1.40m・東西0.95m・深さ0.16mを測る。壁面は垂直、底面は中心に向かってゆるやかに下ってゆく。埋土は炭とともに焼土を大量に含み、底面および周壁は赤化が著しい。内部において、かなり高温の焼成が行われた証左であろう。

2つの焼土壙は、墳丘構築に伴って形成される緩斜面上に位置する。いずれも検出段階で削平は認められず、この緩斜面上に設けられたと考えられる。

つまり、周溝に切られ先行が明らかなSX01は、墳丘造成開始よりも遅らず、周溝掘削によりも後出することはない。一方、古墳と直接の切り合いを持たないSX02は、緩斜面造成よりも遅らないことが確実であるが、周溝を意識した形の検出位置を尊重するならば、古墳築造・周溝掘削と同時、またはそれほどかけ離れない段階で造られたと理解したい。

(註) 横穴式石室の部位名称は、細部において混乱が認められ、未だ統一が取れているとは言い難い。誤解を少なくする目的から、本書で用いた名称について説明する。

- ・玄室：石室の奥で遺骸を安置する部分。
- ・玄門：玄室の入り口で、奥壁の反対にある壁面の絶縁。袖石の玄室側、天井部の前壁を含む。
- ・羨道：玄室と外部を結ぶ通路。
- ・袖部：玄室と羨道の境をなす屈曲部分。羨道側から見た羨道の付け根、突出した袖石の部分を指す。
- ・羨門：羨道の入口。
- ・開口部：石室が破損されて羨門が確定できない場合の、検出状況における入口部分を指す。

2. 焼土壙 (図版6)

2基検出された。いずれも大量に炭を含んでおり、細部の特徴は異なる。

A. SX01 石室の東側、周溝の北側肩部に接している。南側は古墳周溝によって切れられ、周溝の掘削前に造られたことは明らかである。このため本来の形・規模は不明だが、検出段階では東西1.24m・南北0.96mの隅丸方形をなし、深さ0.24mを測る。内部では、底付近に大量の炭が含まれている。

底面ならびに周壁において、被熱の痕跡を認ることはできなかった。

B. SX02 周溝の北西隅付近に位置する。ピット群 (P-1~4) と同じく、周溝

第4章 調査成果－出土遺物

出土遺物については、大半が後世の擾乱によって失われていた。石室内部および墳丘から出土した遺物もわずかで、図化できたものは土器5点・金属器5点にすぎない。

第1節 土器（第9図）

1. 須恵器・蓋（1）

開口部の南西にあたる墳丘斜面から出土した。反転復元によって、全容は把握できたが、口縁部付近の大半を欠き、復元径の10分の1程度が遺存するに過ぎない。

口縁部は下方に屈曲させて、縁状をなす。口縁端部は丸くおさめる。体部はわずかにカーブを描く程度で、明瞭ではない。口縁部付近はS字の屈曲を持つが微弱である。天井部は広く平坦で、中心に整美な宝珠形のツマミをつける。

外面は口縁～天井部に回転ナデの後、ツマミ貼り付けのナデが見られる。天井部で自然釉が付着する。内面は口縁～天井部を回転ナデの後、天井部中央に仕上げナデを施す。

2. 須恵器・杯（2～4）

3点を図化した。いずれもたちあがりを持たない形態で、体部の屈曲が明瞭なもの（2, 4）とゆるやかな皿形（3）をなすものがある。2, 3は開口部前の南西斜面、4は浜道において、それぞれ検出した。いずれも破損した状態であった。

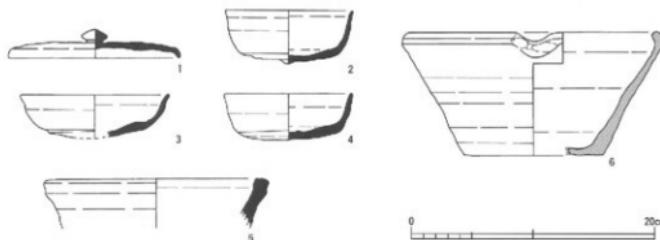
2 深い椀形をなす。底部は緩やかに湾曲して体部側へとのびるもの、しっかりした安定を保つ。体部は大きく屈曲して斜め上方へたちあがるが、直線的で開きも少ない。口縁部でわずかに外反、端部を丸くおさめる。

外面は口縁～体部に回転ナデ、底部がヘラ切り不調整。内面は口縁～底部に回転ナデを施す。

3 浅い皿状で、底部の中央を欠損する。底部は丸底をなす。体部の屈曲は緩やかで、大きく内湾して口縁部へいたる。口縁ではわずかに外反を見せ、端部を丸くおさめる。

外面は口縁～体部に回転ナデ、底部がヘラ切りの後に粗いナデを施す。内面は口縁～底部を回転ナデで調整する。底部中央を欠損するため、仕上げナデの有無は不明。

4 2と同じ形態で、器高はわずかに短いが、復元径はほぼ一致する。焼成時の歪みによって、口径が橢円形となる。



第9図 出土遺物実測図（1） 土器

底部は平坦で、体部が大きく屈曲して斜め上方へ立ち上がる。そのまま直線で口縁にいたり、端部を丸くおさめる。

外面は口縁～体部に回転ナデ、底部がヘラ切りの後に、粗いナデを加える。底部には自然軸が付着する。内面は、全面に回転ナデを施す。

3. 須恵器・甕？（5）

墳丘の南西斜面から出土した。口縁の端部付近のみが遺存する。部位が極めてわずかなため器形の識別は困難だが、厚い器壁を根拠に甕と仮定した。なお、このほか図化できなかった須恵器のなかに、器面にタタキを施したもののが数点出土している。

頭部はゆるやかに外反し、端部付近で内側へ屈曲・直立気味となる。口縁端部は方形に整形され、縁を意識する。

内外面ともに、回転ナデで調整する。口縁端部は、方形に整える際のヨコナデがはっきり残る。口縁の端面から内面にかけて、緑色の自然軸が付着する。

4. 陶器・片口鉢（6）

玄室中央の炭屑層に散らばって検出された。細片になって出土したが、全体の半分まで復元でき器形のほぼ全容が把握できた。共伴する遺物としては銅鏡（I-5）があり、石室が後世に利用使われたとき混入したと考えられる。

平坦な底部から屈曲して、体部が斜め上方へラッパ状に開く。口縁は端部で「く」の字に屈曲して肥厚、縁状をなす。また一箇所に口部を設ける。内面は平坦で、「おろし目」などは見られない。

外面の口縁～体部は回転ナデ、底部は不定方向のナデを施す。内面は、口縁の縁部分を除いて、ほぼ全面に施釉される。調整は不明瞭だが、回転ナデの痕跡がのこる。

第2節 金属器（第10図）

1. 鉄製品・釘（I-1～3）

3本が出土した。I-1・2はほぼ全体が遺存するが、I-3は断片的であった。I-3の中空部に木片が遺存するほかに、木質の付着は認められない。

I-1 漢道掘り下げ中に出土した。開口部に近い流入土に含まれ、床面から15cm程度上層において検出した。一端に打撃を加え、短く折りかえして釘頭とする。尖端部はわずかに厚みを減じる程度で、鋭く尖らせない。釘身は尖端から3分の1程度が屈曲する。断面は方形をなす。

I-2 漢道掘り下げ中に流入土から出土した。出土位置はI-1と近いが、流入土の表面近くに含まれていた。釘頭はI-1と同形態で、打撃を加えて短く折りかえす。尖端部付近は欠損する。釘身は全体に緩やかな湾曲をなす。断面は方形。

I-3 漢道の掘り下げ中に、石棺の南小口に近い流入土から検出した。大半を欠損し、軸部分がわずかに残る。釘頭と尖端部の形態は不明だが、片側で肥厚が確認できるため、釘頭に近い部分が遺存したと考えられる。釘身は中空で、断面が方形を呈する。

2. 銅製品・鉗（I-4）

銅製品で、刀の柄元金具の一部である。全体に劣化が著しい。幅2.0cmの銅版を円筒形に合わせ、片面の小口は0.15cm程度折り曲げられている。曲げられた側の小口が刃に、反対側が柄に向けて装着されるのであろう。

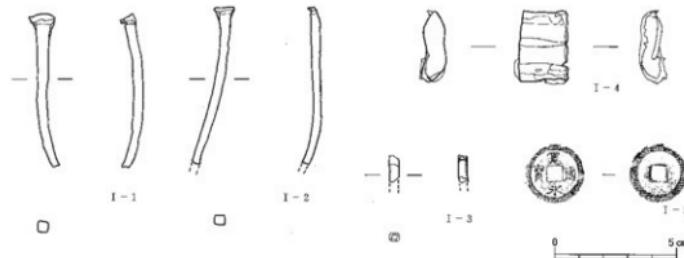
筒の断面は長楕円で、中央が歪んでいる。内法の長径は2.8cm、短径0.8cmである。内部には柄の一部と考えられる木質がわずかに遺存する。

なお、刀身および他の部分は遺存していなかった。後世に持ち出され、消失したのであろう。

3. 銅製品・銅鏡 (I-5)

玄室の炭層内から出土した。直径2.4cmの正円形で、縁の一部をわずかに欠損するが、遺存状態は良好であった。

中央には0.5mm角の孔があり、片面には縦に「寛永」・右から左に「通寶」の4文字が配される。裏面は外縁と穴の周囲に縁があるので、背郭に文字や文様は見られない。



第10図 出土遺物実測図 (2) 金属器

表2 出土遺物法量表

No	出土位置	種別	器種	口径	器高	備考
1	墳丘の南東部斜面	須恵器	蓋	*13.7	2.3	
2	墳丘の南東部斜面	須恵器	杯	*10.3	4.3	
3	墳丘の南東部斜面	須恵器	杯	*12.0	△3.6	
4	漢道・流入土内	須恵器	杯	*10.4	3.8	
5	墳丘の南東部斜面	須恵器	壺?	*16.3	△4.05	口縁部のみ遺存
6	玄室床面・炭層内	陶器	片口鉢	*20.5	10.1	後世の混入品
No	出土位置	種別	器種	長さ	幅	厚さ
I-1	漢道・流入土内	鉄製品	釘	6.35	0.45	0.45
I-2	漢道・流入土内	鉄製品	釘	△6.5	0.4	0.4
I-3	漢道・流入土内	鉄製品	釘	△1.08	0.4	0.35
I-4	漢道・流入土内	銅製品	刀の部品	3.0	2.2	0.04
I-5	玄室床面・炭層内	銅製品	鏡	2.4	2.45	0

*I-4の法量は、円筒の小口を縦にしての長さ・径・板の厚みを示す。

*△は残存値、*は反転復元した数値を示す。(単位はcm)

第5章　まとめ

大龜谷山古墳は調査の結果、南北11.7m・東西14.3mの方墳であることが判明した。主体部は横穴式石室で天井石を含めて遺存するものの、石室内部の状態はよくなかった。以下、調査によって得られた成果について、若干の検討を加えてまとめとする。

第1節　主体部－横穴式石室について

1. 古墳の築造時期と石室への埋葬状況

横穴式石室の玄室床面は、後世の擾乱によって埋葬当初の状況が損なわれ、遺物も大半が消失している。埋葬の様子や造営時期を考える手がかりは、極めて断片的である。

古墳に伴うと考えられる遺物は、流入土中および古墳周辺から出土した中に少数認められる。蓋杯逆転以降の形態である杯A身と古墳時代蓋杯の影響がある杯Gh、宝珠ツマミを持つ杯A蓋で、このうち杯A身は、口径や口縁・体部の形態からTK217新段階に併行する。共伴の資料が少ないため不安はあるが、古墳の築造も同時期の7世紀前半と考えたい。ただし杯A蓋は内面にカエリを持たず、天井部の形態も平坦で、同じ器種の杯身よりも示す年代感が新しい。

玄室に遺存する組合型箱式石棺は床面に墓擴を掘削して設置され、埋葬当初の位置を保っていた。玄門側に偏在し、奥壁付近にはかなりの空間が残ることから、石棺のほかに数回の埋葬が考えられる。羨道内部の流入土からは釘が数点出土し、木棺を用いた埋納を想定させるほか、杯身よりも後出する杯A蓋の存在も、追葬時の副葬品として理解できよう。

2. 横穴式石室の規模と平面規格

石室は両側に袖を持ち、いずれも玄門幅の1割を下回る突出である。大規模とは言えないが、袖石に角柱状の石材を用いるため、明瞭な印象を受ける。

玄室の平面は方形に近く、側壁の中央付近から奥壁に向けて少しづつ狭くなる。玄門幅の玄室長に対する割合は2.025で、ほぼ2:1の比率である。また奥壁の幅は両袖の間隔に等しく、袖部を石室の主軸と平行に延長すると、奥壁幅と一致する。

羨道は乱れが大きく、側壁および天井石が消失する。特に開口部付近は石材の散逸が著しく、渓門の位置も不鮮明である。基底石を亡失する西側壁では、東側壁と同じ長さまで基底石を据えた痕跡を検出しているが、さらに外側へ延びる形跡はない。墓壙の先端はある程度の削平が予想されるとはいえ、墳丘全体の状況から見ても大きく羨道が延びるとは考えがたく、わずかながら遺存する閉塞石や、遺存する最大長と玄門幅の比率がおよそ4:1となる傍証も、東側壁先端付近を渓門とする根拠にしたい。

3. 横穴式石室の石材構築

玄室のなかで目を惹く特徴として、石材一枚で構成されている奥壁がある。袖部の間隔と奥壁の幅の一一致は、奥壁の全容が羨道から見渡せるような配置であり、長大な奥壁を顯示する意図が窺える。両側壁に包み込まれるような配列から、奥壁を立てた後で側壁を積み上げたことがわかる。

西側でやや小振りの石を用いるものの、両側壁の積み上げ方法は共通する。石材の目地が直線に通り、一定の高さで揃えながら構築している。西側壁では基底石から2・3・4段目で高さを揃え、3段目は袖石の高さと一致する。東側壁は下から2段目と4段目で高さを揃えるが、西側壁に比べると多少乱れた印象を受ける。

東側壁の基底石をみると、袖石と奥壁の間にはめこまれるように配置され、奥壁に続いて袖石の位置を決めてから基底石を並べた状況が読み取れる。平面と同じく立面においても袖石が規格の基準となっている。

以上の状況をふまえ玄室の構築を整理すると、a. 奥壁を立てる b. 袖石を立てる c. 基底石を据える d. 側壁を積み上げる e. 天井石との設置面を整える f. 奥壁側から天井石を架構する の6工程に復元できる。箇道については、大半の石材が失われたため検討できなかった。玄室と同じく袖石が基準をなすものの、石の目地が合わず、異なる工程で築かれた可能性もある。

第2節 古墳構築過程の復元

石室の構築状況に加えて墳丘の堆積状況を検討し、古墳の構築過程を復元する。

1. 造成

古墳の立地する丘陵は、平均勾配が22度を測る。この急斜面へ構築するに先立って、地形の整備が行なわれる。墳丘の背後には、一定の幅で丘陵を削り取った緩斜面が認められ、その範囲は墳丘下の旧地表面にまで及んでいる。生み出された土砂は、墳丘の構築などに使用されたのであろう。

統いて造成した範囲の中央に、U字形の墓壙を穿つ。墓壙は斜面に直交して設けられるため、石室の床面を平坦にするには、斜面に直交した大規模な掘削が必要となる。奥壁側の深さは旧地表面から2mを越え、墓壙周壁を二段掘削にせざるを得なかつたと考えられる。

2. 石室基底部・床面の構築

次に横穴式石室の基礎部分を構築する。奥壁の設置（石室構築のa工程）に前後して、墓壙の周壁が改修される。間隔が広く空く二段掘削の上部に先行して盛り土を行ない、奥壁の安定を高めた上で、裏込めを詰める。統いて両袖石から順に側壁の基底石を配置（b/c工程）、床面の造成もこの段階で実施する。

側壁の積み上げ（d工程）からは、東西の側壁において構築工程に違いが見られる。墓壙内の堆積状況によれば、東側壁はそのまま第2石の積み上げを行ない、高さを揃えてゆく一方、西側壁は基底石の配置後に墳丘の積み上げを先行しており、改めて掘り方を設けてから石材を積み上げている。旧地表面の造成後でもなお西側への傾斜が著しいために、一旦墳丘を積むことで東西の墓壙を同じレベルに保つたと考えられる。

3. 墳丘と石室上部の構築

さらに側壁と墳丘を積み上げるが、側壁の上部は掘り方を用いず、石材を積んだ直後に墳丘を積み上げる工程を繰り返す。東西の側壁・墳丘が天井の高さに達した時点で、小ぶりな石材で天井石との設置面を整え（e工程）、天井石を架構（f工程）して石室が完成する。

4. 墳丘の完成と外部施設の構築

石室完成後は、天井石の上を覆って墳丘を整え、周溝を掘削して古墳の構築が終わる。

構築上の特徴として、石材の構築に先立ち墓壙を改修する点が挙げられよう。奥壁側では、設置にあたって二段墓壙の上部を埋め、間隔を狭めている。奥壁設置との前後関係については明確にしがたいが、巨大な石材を支えなしに長時間保持することは困難であり、改修後に奥壁を立てたものと考えておきたい。また西側壁は、基底石の設置後に墳丘を盛ってから再び掘り方を設ける。これらは各過程において

直面する地形上の矛盾を解消することを目的としており、急な斜面を掘りこんで石室を構築したことが原因と考えられる。

第3節 墳丘周辺の遺構と祭祀儀礼

古墳の周辺には、外部施設である周溝のほか、5基のピット、2基の焼土壙が存在する。これらの状況について整理し、類似する事例と比較して、遺構の性格を検討する。

周溝の丘陵高所側にある北辺では、底部において炭の堆積が検出された。中央部分にまとまって分布し、掘削直後に設けられた状況から、なんらかの意図を持って配された可能性が高い。近隣では加古川市奥新田東2号墳の周溝で、炭の堆積が確認されている。周溝や墳丘、石室内部における炭は、墳丘／外部施設の祭祀・儀礼に伴う、とする意見があり、大龜谷山古墳の事例も意図的な状況を評価して、古墳の築造中、または築造直後に執り行われた祭祀の痕跡と考えておきたい。

ピット群のうち、墳丘の北西で検出されたP-1～4は、平行四辺形状に配置され、柱痕跡を持つ深いものが東、柱痕跡を持たない浅いものが西に並ぶ。古墳の周囲から規則的に配置されたピットは、いわゆる「木製埴輪」の樹立痕跡と認識されているが、神奈川県鶴井沢第1号墳や鳥取県劔家平1号墳など、埴輪祭祀が消滅した後の築造された古墳でも、柱穴痕跡の存在は報告されている。大龜谷山古墳で検出されたピットは、墳丘を取り巻く配置ではなく、幡や旗など、いわゆる「はたさしもの」を立てた可能性が考えられる。また柱痕のない浅いピットについては、支えなどの役割も想定される。

また墳丘上に設けられたP-5でも、炭の堆積が確認された。墳丘の完成後に掘りこまれていることから、周溝と同じく古墳築造中～直後の祭祀に関わると考えられる。

調査区北西の緩斜面から検出された2つの焼土壙は、設けられた時期や特徴に違いが見出せる。古墳に先行するSX01は、大量の炭を内包していたが焼土ではなく、周壁・底部も火を受けた形跡が認められない。一方、SX02は炭と焼土が多く含まれ、底面の中央から北側周壁にかけて火を受けた形跡が明瞭に見られた。被熱部分の一部は還元状態で、土壤での高温焼成が想定される。これらの差は、両者の性格が異なることを示すものであろう。同じような遺構は、神戸市印路古墳群や姫路市西脇古墳群などで知られている。印路古墳群では、二つの古墳（C第2・3号墳）を隔てる周溝の底から、最下層に焼土を含まない炭・灰の堆積した土坑を検出している。また西脇古墳群では明らかに火葬墓と呼べるものと、炭のみが埋納された土壤の2種類が検出されている。

古墳群内や古墳の至近で検出される焼土壙は、①被熱痕跡を持たず、骨片を含まないもの ②被熱の痕跡が明瞭で、埋土に焼土や骨片を含むもの ③被熱痕跡を持たず、埋土に骨片・焼土を含むものに整理される。骨の含まれない①を造営時などの祭祀行為に関わる遺構・骨が含まれる②を火葬墓・③が火葬塚などを埋納した土壤として、性格が想定されている。

この意見を援用すれば、被熱痕跡がないSX01は①に該当し、他所で生成された炭を埋納した遺構と考えられる。周溝内の炭層およびP-5と同じ状況であり、造られた背景に共通性が伺える。一方SX02は焼成の痕跡が③に該当するものの、骨片が検出されなかった点を始め、墓と比定するには疑問点も多い。古墳築造後の祭祀遺構である可能性も含めて、現時点では性格を決定することは困難である。

以上の検討から、墳丘の周辺で検出した遺構は、古墳の築造時または築造後に行なわれた祭祀儀礼に関わったと考えられる。古墳との前後関係から、焼土壙SX-01が築造前の、ピットP-5と周溝内の炭層が築造中または直後の、ピット群P-1～4は築造後の各儀礼に伴う。なお、焼土壙SX-02は、儀礼との関

連を明らかにできず、可能性を指摘するにとどまった。

遺物の出土もなく直接的な物証が不足しているため、個々の祭祀内容を知る手がかりを十分得ることはできなかったが、これらの遺構が古墳の築造に付帯して行なわれる儀礼の一セットを構成しているといえよう。

大龜谷山古墳は、東播有数の古墳群である平莊湖古墳群から北東へ約6キロ、西条古墳群から北へ約5キロ離れている。周辺に存在する中山古墳群・奥新田古墳群・白沢古墳群・八ツ塚古墳群などとも、近接とはいえない距離を持ち、周辺には他の古墳も見られない。大きく折れ曲がって延びる谷の奥部に母体であろう集落から遮断された状態で存在する単独墳である。

来住山地を挟んだ北側にある小野市域でも、同様の立地を示す古墳が散見される。茹集落の谷奥に立地する池の内西古墳・家老戸谷集落の背後にあたる丘陵の麓にある草内古墳など、いずれも未調査ながら横穴式石室を持つ古墳として知られている。丘陵の谷奥に単独で立地する来住西靈慈山古墳も、大龜谷山古墳と同様の立地をなす。

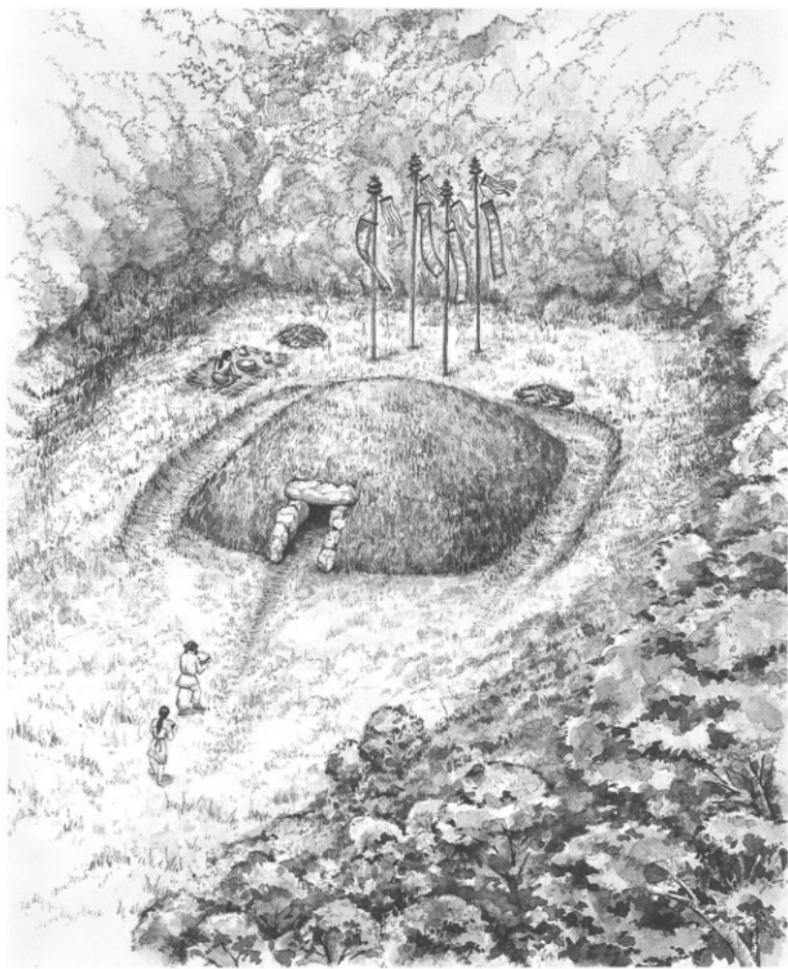
特異な立地条件は、集落と墓域の明確な分離や、造営の背景をなす集団の小規模などを反映したものと想定できるが、具体的な理解につながる手がかりは現在のところない。加古川下流右岸では、古墳時代後期に入って平莊湖周辺に一大古墳群を形成する一方で、横穴式石室を主体にもつ古墳2・3基で構成される小規模な古墳群が点在する。大古墳群と小規模な古墳群に加えて、大龜谷山古墳のように単独で立地する古墳が混在した状況は、同地域における古墳時代の複雑な様相を示しているといえよう。

山陽自動車道建設に伴って大龜谷山古墳の近隣では、小野市勝手野古墳群・加古川市奥新田古墳群が調査されており、その成果についても順次刊行が予定されている。今後、これらの調査成果を総合することによって、加古川下流右岸の古墳文化に新たな視座が開かれることを期待したい。

参考文献

- 高橋美久二「木製の埴輪」再論『京都考古』49号 京都考古刊行会（昭和63）
森本徹「火葬墓と火葬遺構」『大阪文化財研究』第2号 （財）大阪文化財センター（1991）
土生田純之「古墳構築過程における儀礼－墳丘を中心として－」『古墳文化とその伝統』勉誠社（1995）
『下谷古墳群・印踏台状墓・印踏古墳群C』兵庫県教育委員会（1992）
『西脇古墳群』兵庫県教育委員会（1995）
『奥新田東古墳群』『平成7年度 年報』兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所（1996）

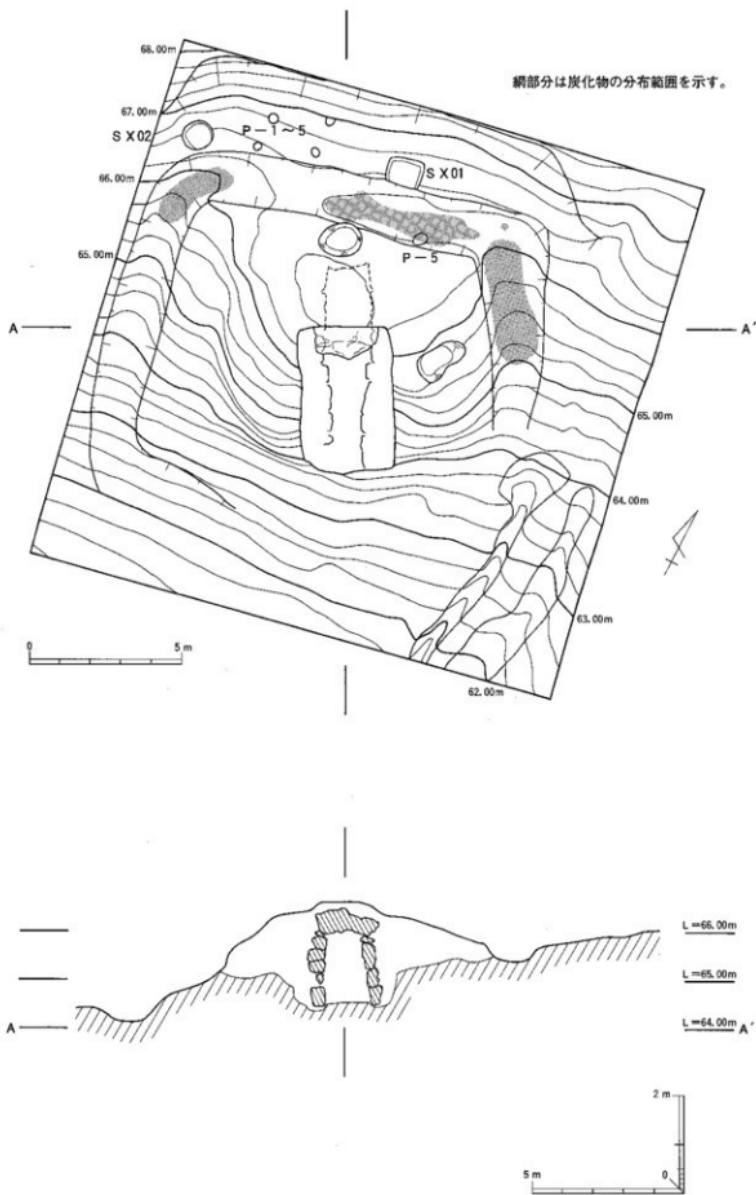
図版



大龜谷山古墳の様子（推定復元）

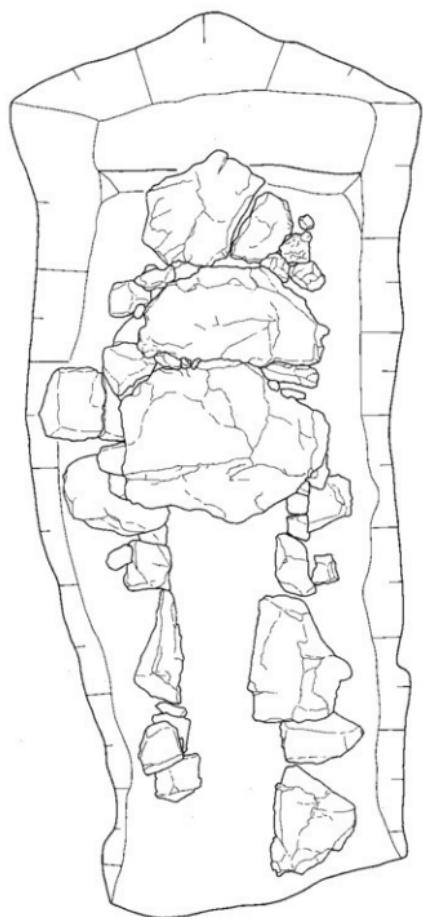
イラスト 小東畫郎

図版 1



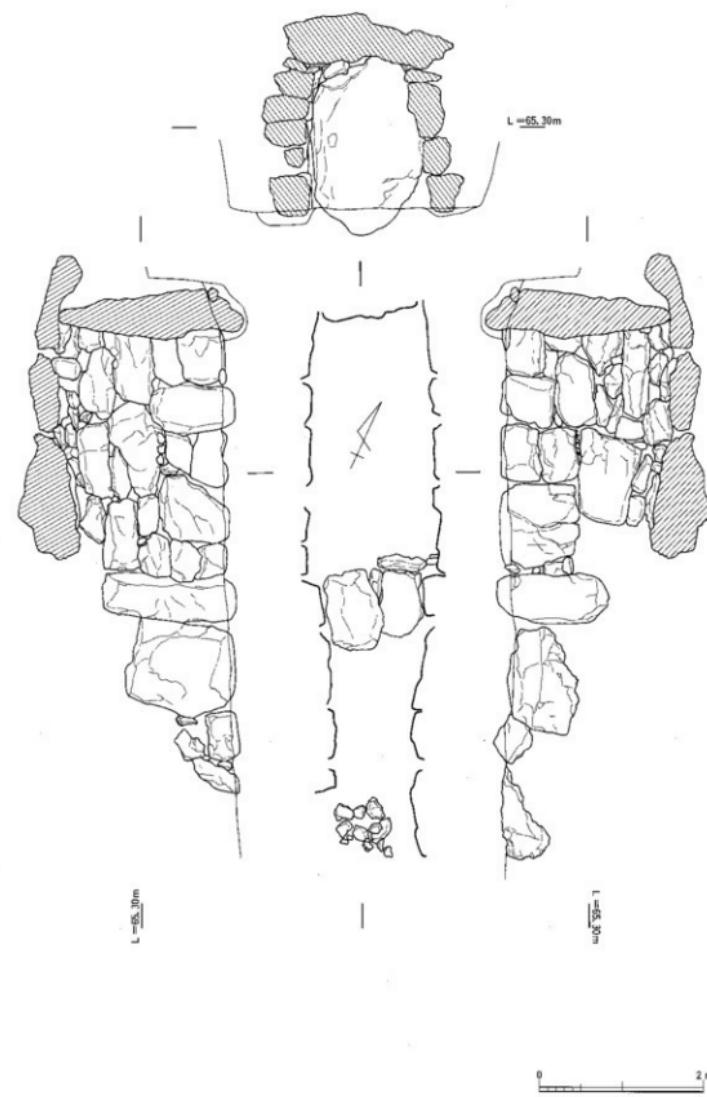
填丘測量図(検出時)

図版 2



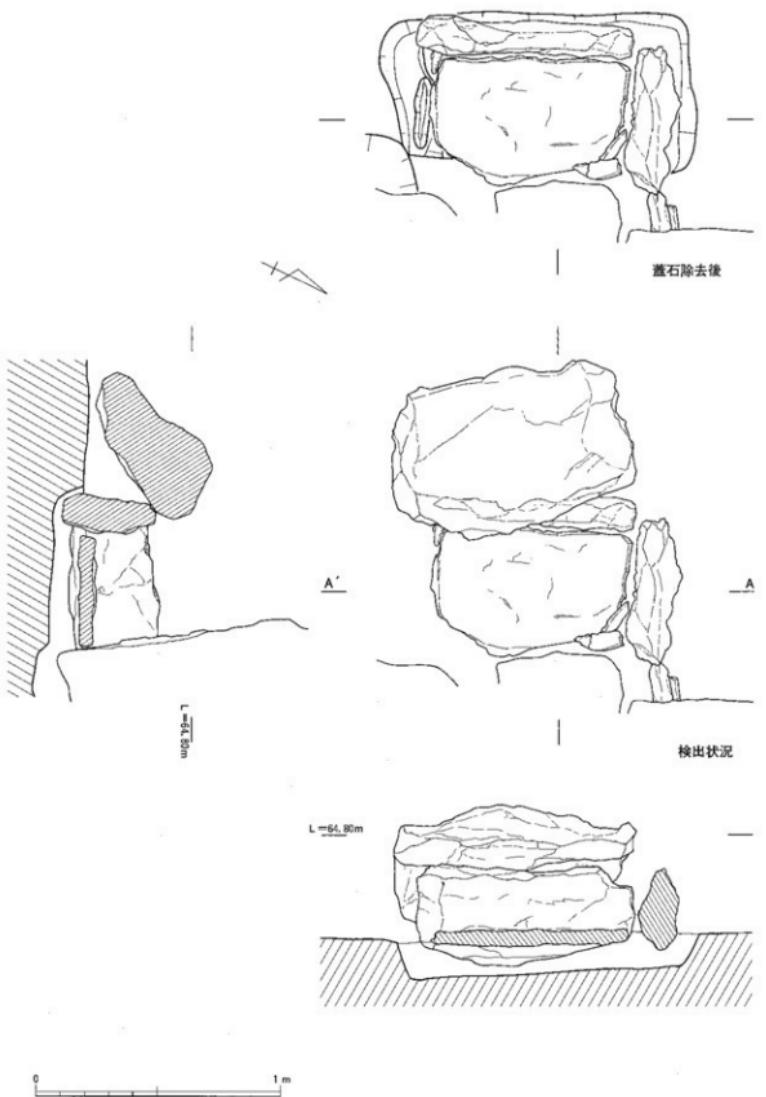
0 2m

石室平面図



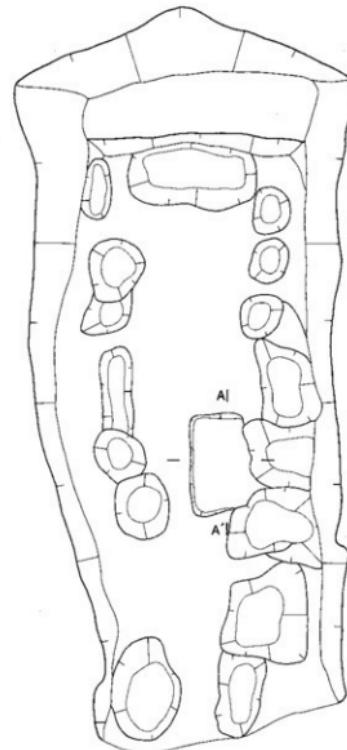
石室展開図・床面平面図

図版 4



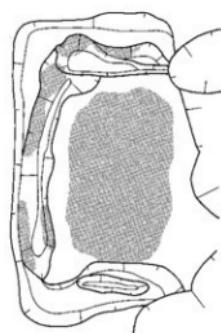
石棺展開図

横穴式石室墓壙



0 2m

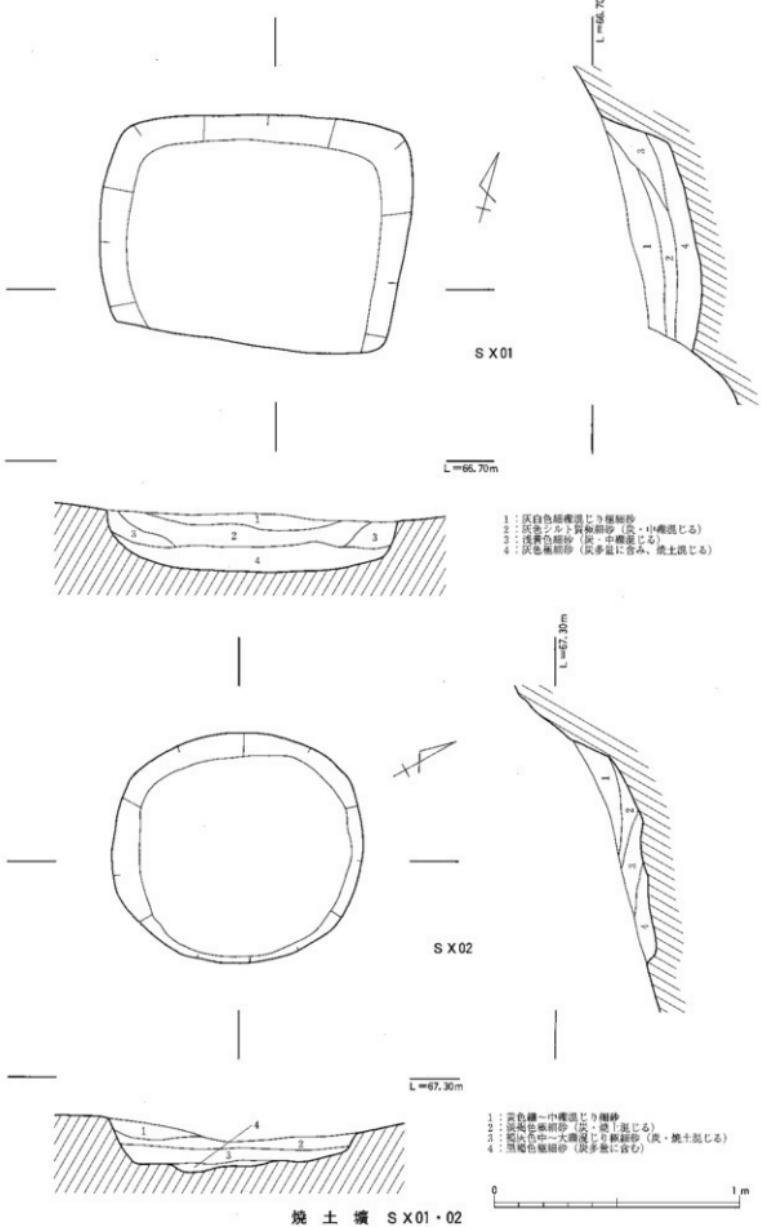
石室・石棺墓壙平面図



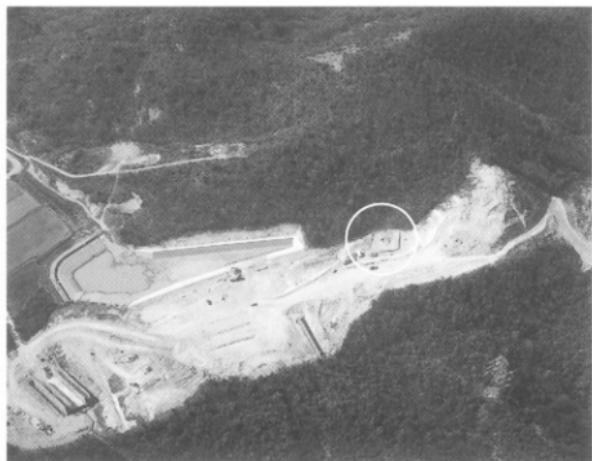
0 2m

石棺墓壙

図版 6



写真図版



工事の進む山陽自動車道と大龜谷山古墳

上：遠景 下：古墳アップ（いずれも北東上空から）



写真図版 2



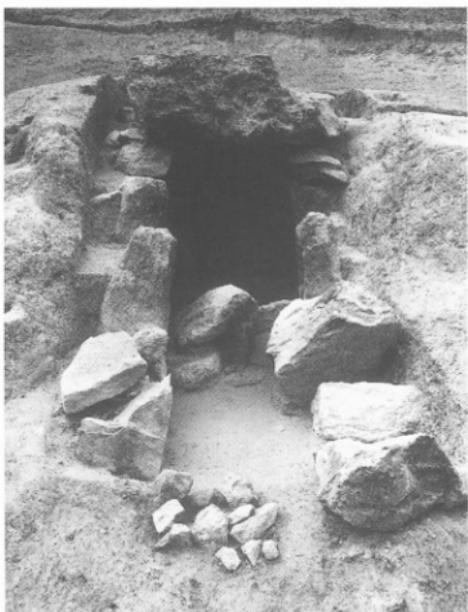
古墳全景
(埴丘・周溝)



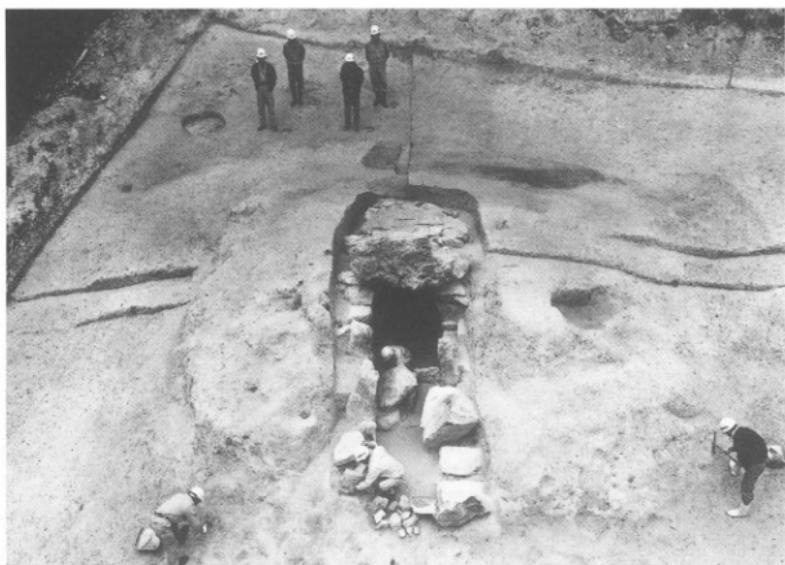
石室 天井石上面
(全景／東から)



石室開口部
(天井石検出後)

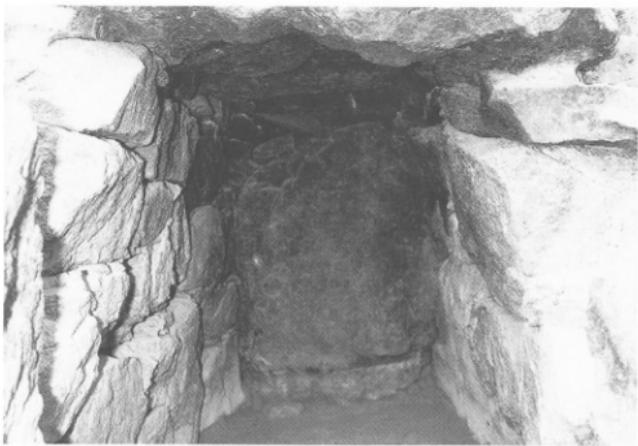


石室開口部
(羨道・閉塞石)

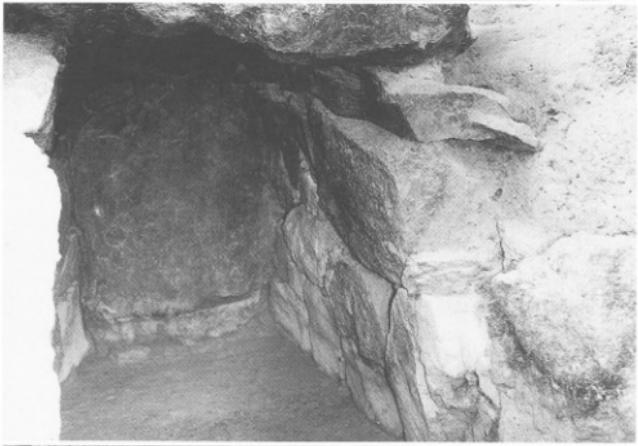


填丘検出作業（左上人物 4 人の足元がピット群 P-1～4）

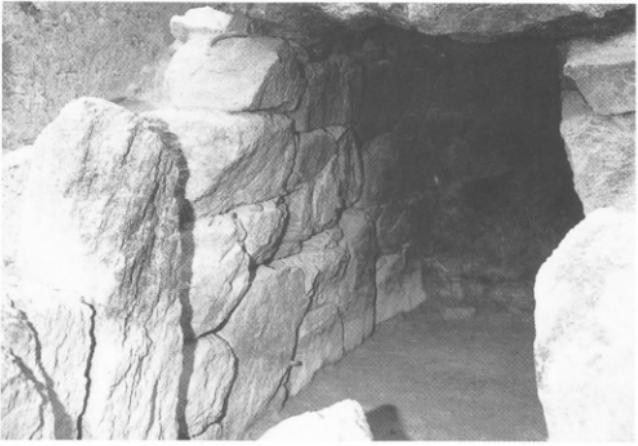
写真図版 4



玄室 奥壁



玄室 左側石



玄室 右側石



箱式石棺
(検出状況)



箱式石棺
(南小口から
内面を見る)

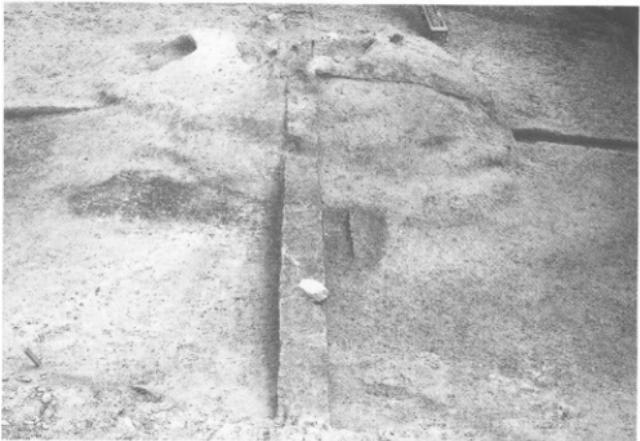


箱式石棺
(蓋石除去後
／棺身全景)

写真図版 6

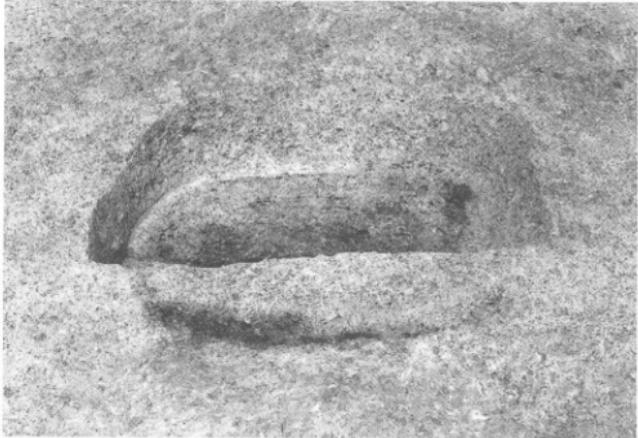
周溝

(炭層検出段階)



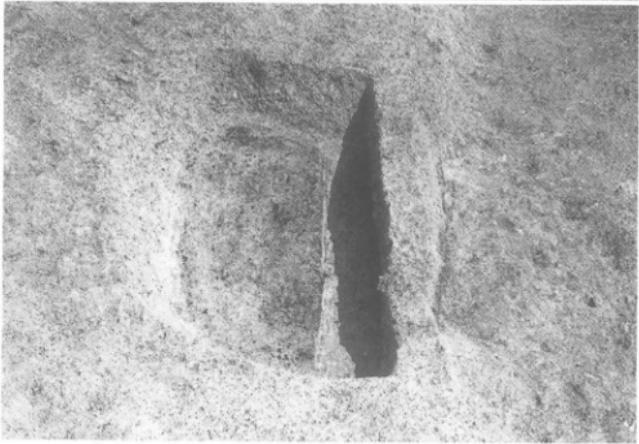
焼土壙 S X01

(南から)



焼土壙 S X02

(西から)





写真図版 8



I-1



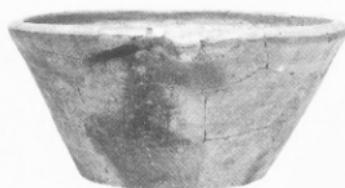
I-2



I-3



I-4



I-5



I-1



I-2



I-3



I-4



I-5

報告書抄録

ふりがな	おおかめにやま こふん							
書名	大龜谷山古墳							
副書名	山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXII							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第212冊							
編著者名	深井 明比古・柏原 正民							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011							
発行年月日	西暦2001年(平成13年) 3月30日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
大龜谷山	兵庫県加古川市 平荘町	28210	940290	34度49分27秒	134度53分24秒	全面調査 ~ 19950317	324m ²	山陽自動車道建設事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大龜谷山	古墳	古墳時代後期	古墳(主体部:横穴式石室)1基 焼土塙 2基 ピット 5基	土器(須恵器・陶器) 金属器(刀部品・鉄釘・銅錢)		天井石が遺存		

大龜谷山古墳

—山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告書 X X X III—

平成13年3月30日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0011 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

T E L. 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 菱三印刷株式会社

〒652-0803 神戸市兵庫区大開通2丁目2番11号